



LIBRARY

いわき総合高校図書委員会 平成31年1・2月号

先生のオススメ・話題の本総集編

発行月	ご紹介いただいた先生	タイトル・著者	生徒へひと言
5月号	石井 克典 先生	がらすど うち 硝子戸の中 ◎ 夏目 漱石 	「人生、互いにおもいきって正直に、真面目に自分の本心、弱点をさらけ出す事が大切だ。教師と生徒の関係においてはなおさらのこと。互いに、何か言ったら黙って、笑われぬか、恥をかかないか、失礼で怒られはしないかと遠慮して自分を隠すべきではない。そつでなければ現状維持でしかなく共に向上する事は無いのだから。」漱石のことばが心に響きます。自分とは異なる生き方、考え方を知り、多様な世界を身近に手軽に体験できるのが読書です。古典的な名著と言われる読書を通して自分の生き方の原点を、早期に発見する事を願います。
6月号	齋藤 尚美 先生	日野原重明 いのちと 勇気のことば ◎ 日野原 重明 	日野原重明さんが以前お書きになられたもので『生きかた上手』があります。ベストセラーになりました。この本も深いけれど読みやすいです。月に1、2度いわき総合図書館に行きます。先週中・高生向けのお薦めコーナーに、この本が置いてあり、手に取ってみました。1章の最初から惹きつけられ、いつの間にか、涙が溢れていました。10代の感受性の鋭い皆さんの心に、私達とは比べものにならない程大変な経験をされた著者から、私達戦後世代への“いのち”のメッセージがじわじわと優しく伝わってくる1冊です。
7・8月号	太田 隆明 教頭先生	世界美術大全集 ◎ 高階 秀爾他 	45巻の世界美術大全集はB4判の大画面で、図書室奥の書棚の最下段を占領している。掲載画像数は2万点を超え、見ごたえ横綱級。本校の蔵書の中でも最も高額なシリーズである。ケース裏の価格表示は2万円/冊（現在は2万8千円！）。生徒諸君には、45冊全部でいくらになるか計算する前に、是非図書館で手に取って見てほしい。西洋第20巻「ロマン主義」。ページを開くとドラマチックな絵画が次々に目に飛び込んでくる。図版No.38ドラクワ作の「民衆を導く自由の女神」は見開きの大画面。タイトルの女神の美しさもさることながら、私は画面左下に描かれた、倒れている男性が履いている「靴下」が気になります。
10月号	國田 顕應 先生	わが指の オーケストラ ◎ 山本 おさむ 	聴覚障害児の教育に情熱を傾けた、高橋潔という実在の人物について描かれたものです。言葉という世界を知らなかった戸田一作は、意思を伝えられず、自分自身のことをわかってもらえずに苦悶の生活を送っていた。しかし、高橋潔との教育的な関わりの中で、手話を通して言葉の世界に出会い、教師の道を歩み出すことになる。作者の山本おさむは、『遥かなる甲子園』で聾学校（現在の視覚特別支援学校）の野球部の子どもたちを描き、『どんぐりの家』で聴覚障害と知的障害の重複障害の子どもを描いて、社会的に大きな反響を呼びました。福祉、障害児教育、社会問題に関心のある生徒の皆さんにぜひ読んでほしい作品です。
11月号	遠藤 崇 先生	深夜特急 ◎ 沢木 耕太郎 	インドのデリーからイギリスのロンドンまで、乗合いバスで行く。ある日そう思い立ったく私>は、仕事をすべて投げ出して旅に出た。途中立ち寄った香港では、街の熱気に酔い痴れて、思わぬ長居をしてしまう。1年以上にわたる遠路ロンドンへ向かう放浪の旅。今、自分は日々の充実に戻って、仕事をどかんと休むことも出来ないし、ふらっと遠出をすることも叶わない。もっとずっと若いころに色んなところに行って、色んな旨いものを食べて・・・なんてことをしておけば良かったなあと悔やむことが多い。私が『深夜特急』全6巻を一週間とちょっとで読破したのは、23歳のころ。そのころには、自分はまだ就職して、やはり自由な時間は少なかった。だから、高校生であるみんなにこそぜひ読んでほしいと思う。

※図書日より『LIBRARY』で毎月紹介した“先生のオススメ”です。先生方のとっておきの一冊をぜひ読んでみてください。お忙しい中、ご協力いただいた先生方ありがとうございました！

発行月	タイトル・著者		あらすじ等
6月号	バカヤンキーでも死め気でやれば世界の名門大学で戦える。	◎鈴木 琢也 	中学1年からグレ始め、ケンカや窃盗を繰り返し度々警察のご厄介になっていた著者が、世界の名門「カリフォルニア大学パークレー校」に合格するまでの物語。鈴木琢也さんは、高校を卒業したあと一旦社会人として働き、専門学校で情報処理の国家資格を取得。IT系上場企業に就職後、米国留学を決意して勉強を始めます。著者は言う「カリフォルニア大学パークレー校に入学後に出会った学生たちは、ひと握りの天才以外は、自分と同じく必死で努力していた。よく地頭などというが、どんぐりの背比べ程度の差だ」。「本当にできる人が持っているのは“学力”というより“学ぼうとする力”だ」と……。
7・8月 夏休み号	かがみの孤城	◎辻村 深月 	中学生の安西こころは、ある出来事をきっかけに学校へ行けなくなる。どこにも行けず閉じこもっていたある日、こころの部屋の鏡が、突然、光り始める。輝く鏡をくぐり抜けた先には、不思議な城があった。そこにいたのは、こころと同じく学校へ行けない6人の中学生。城を仕切っているのはオオカミのお面をつけた少女、自称「オオカミさま」。オオカミさまは、彼らにこう告げる。「城の中には、なんでも願いが叶う“願いの鍵”がある。それを見つけ出せば、何か一つ願いは叶うのだ」と。鍵はいったいどこに？“オオカミさま”の正体は？最後の「エピローグ」ですべてが明らかに。読み終えたあと、温かな気持ちに包まれます。本屋大賞受賞作品!!
9月号	ファーストラヴ	◎梶 裕貴 	女子大生・聖山環菜は、キー局のアナウンサー試験に失敗した直後、画家である父親を刺殺した容疑で逮捕される。環菜は警察の取り調べに対し、「動機はそちらで見つけてください」と答えたという。臨床心理士の真壁由紀は、この事件を題材としたノンフィクションの執筆を依頼され、環菜やその周辺の人々と面会を重ねていく。環菜のみならず、臨床心理士の由紀、由紀の義弟で環菜の弁護士・迦葉が抱える“心の闇”が徐々に明らかに……。終盤の息詰まる法廷劇も読み応え十分です。臨床心理士の由紀の視点で物語が進んでいきますので、精神医学や心理学に興味のある人にオススメです。第159回直木三十五賞受賞作品。
10月号	手紙	◎東野 圭吾 	両親を早くに亡くした剛志と直貴の兄弟は、この世でたった二人きり肩を寄せ合い生きてきた。身体を壊し働くことができなくなった兄が、弟の大学進学のためのため、思いがけず強盗殺人を犯してしまう。服役中の兄から、月に一度手紙が届く。強盗殺人犯の弟という運命を背負った直貴が、周囲の差別や偏見に苦しみながら、やがて自分の家族を持つまでになる。東野圭吾さんの『手紙』は、東野さんの作品の中でも、名作中の名作といわれています。100冊近くある作品中、ファンが選ぶランキングベスト10に必ず入る作品です。何度か舞台化・映像化されていますが、原作を読んで欲しい作品です。終盤は号泣必死です。ハンカチの準備を◎
	人魚の眠る家	◎東野 圭吾 	娘の小学校受験を間近に控えたある日、“娘がプールで溺れた”という報せが届く。播磨夫妻に告げられた医師の言葉は「おそらく脳死」という残酷なものだった。一旦は現実を受け入れた二人だったが……。『脳死と臓器移植』の問題を正面から捉えた社会派ミステリです。ミステリ作家としてお馴染みの東野さんですが、社会問題をさりげなく取り上げた作品が少なくありません。動機や巧みなトリックを見破る楽しみだけでなく、著書自身がエッセイ等で「人間を描く」と語っている通り、この作品もしっかり人間が描かれています。いくつかシリーズものもありますが、特にオススメは加賀恭一郎シリーズです。ぜひ、ご一読ください。
11月号	こんな夜更けにバナナかよ	◎渡辺 一史 	本書には「筋ジス・鹿野靖明とボランティアたち」という副題が付いています。筋ジスという難病を抱え、自分では寝返りもできない、24時間介護が必要な鹿野さんと、彼を支える学生や主婦らボランティアの日常を描いた作品です。タイトルの『こんな夜更けにバナナかよ』は、夜中に鹿野さんが「バナナを食べたい!」と言い出しときのボランティアのつぶやきです。鹿野さんは重度の不眠症でした。不眠の原因は“死への恐怖”だったようです。寝てしまったら、自覚することなくそのまま逝ってしまうのではないかと……。という不安が強かったようです。将来、医療・福祉・教育関係の仕事に就きたいと思っている人、必読ですよ!
	空をゆく巨人	◎川内 有緒 	主人公は、いわき市の会社経営者、志賀忠重さんと現代美術の世界では知らない人がいないという蔡國強（ツァイ・グオチャン）さんの2人。本書を描くきっかけは、母親の故郷にある“いわき回廊美術館”。「いわき回廊美術館」は、2012年高松宮殿下記念世界文化賞の美術部門を受賞した中国人アーティスト蔡國強さんのスタジオと「いわき万本桜プロジェクト」事務局が計画し、2013年4月28日に開館。その「いわき万本桜プロジェクト」の代表が志賀忠重さんです。美術館とはいえ、山の中に造られた野外施設で、入場無料営業時間は「夜明けから日没まで」とあり好奇心をかき立てられたそうです。「ハイジになれるツリーハウス」や「ツリーハウス」もあります。場所は平中神谷、年中無休です。※ 第16回開高健ノンフィクション賞受賞作品!